



平成30年度 果樹情報 第5号

(平成30年5月22日)



福島県農林水産部農業振興課

1 気象概況（5月前半：果樹研究所）

5月1～3半旬の平均気温は、1半旬が15.9℃で平年より0.9℃高く、2半旬が12.8℃で平年より2.9℃低く、3半旬が16.8℃で平年より1.4℃高く経過しました。
この期間の降水量は45.5mmで平年の110%でした。

2 発育予測

(1) もも

DVRモデルによる「あかつき」の発育予測では、本年の硬核開始日は6月3日頃で平年より7日早い見込みです。

表1 ももの発育予測（5月16日現在）

品 種	硬核開始日		
	本年予測	平年	平年差
あかつき	6月3日	6月10日	7日早い

注) 発育速度（DVR）モデルによる発育予測。平年は1986～2015年の平均。

(2) ぶどう

DVRモデルによる「巨峰」の開花予測では、今後の気温が平年並に推移した場合、開花始が6月2日頃、満開は6月5日頃の見込みです。

表2 ブドウ「巨峰」の開花予測日（5月16日現在）

発育ステージ	今後の気温経過と開花予測日				
	昨年	平年	平年並み	2℃高い	2℃低い
開花始め	6月1日	6月6日	6月2日	5月31日	6月5日
満 開	6月6日	6月10日	6月5日	6月2日	6月9日

注) 発育速度（DVR）モデルによる発育予測。平年は1988～2015年の平均。

気象庁[営農活動に役立つ気象情報] <http://www.jma.go.jp/jma/kishou/nougyou/nougyou.html>

3 栽培上の留意点

(1) 凍霜害対策

果樹類の多くは幼果期となっていますが、引き続き気象予報に注意し、降霜のおそれがある場合は防霜対策を実施しましょう。ブドウやカキは展葉期に凍霜害を受けると花器だけでなく新梢も障害を受けるので注意が必要です。

(2) 土壌管理

現在、土壌水分状態は適湿ですが、降水量が少なく土壌の乾燥が続く場合は、以下の対策を実施しましょう。

ア かん水

5月から夏期にかけて果樹園からの1日当たりの蒸発散量は、晴天日で6～7mm、曇天日で2～3mm、平均で4mm程度ですので、1回のかん水は25～30mm程度(10a当たり25～30t)

を目安として、5～7日間隔で実施しましょう。保水性が劣る砂質土壌などでは、1回のかん水量は少なくして、かん水間隔を短くします。

イ 草刈り

樹と草との水分競合を防ぐため、草生園では草刈りを行いましょ（草生園における地表面からの蒸発散量は、刈り草をマルチした場合、草刈りしない場合の約半分とされる）。

ウ マルチ

刈り草や稲わらのマルチを行い、土壌水分の保持に努めましょ。

(3) も も

この時期は新梢や果実の生育が旺盛な時期ですので、着果管理や土壌の水管理等を徹底し、新梢および果実の初期生育を促進ましょ。

ア 予備摘果

摘らいや摘花を実施しなかつた場合や摘らい程度が弱く着果数が多い園地では、予備摘果を必ず実施ましょ。

イ 仕上げ摘果

果実肥大に差が見えはじめる満開後40日頃から実施ましょ。なお、本年の硬核期開始は6月3日頃（果樹研究所）と予想されるので、仕上げ摘果はこの頃までを目安に実施ましょ。

摘果の程度は最終着果量の1～2割増とし、樹勢や双胚果、核障害の今後の発生状況を見ながら加減ましょ。

図1に示すように核頂部に断裂などの重度の障害がある果実は、満開後45日頃になると果頂部の片側の肥大不良が目立ってくるので、果形に注意して仕上げ摘果を実施ましょ。



図1 核頂部の障害と果形の変形

ウ 樹勢回復対策

早めの摘果作業に心がけるとともに、適正な着果数まで速やかに摘果し、新梢の生育を促ましょ。また、乾燥傾向にある園地においては積極的にかん水を実施するなど、土壌水分の確保に努めましょ。

新梢伸長が劣り、葉色が淡いなど樹勢低下がみられる園では、早期の摘果により着果量を制限するとともに、5月中を目安に、速効性肥料による追肥（チッ素成分で2kg/10a程度）、または窒素成分を含む葉面散布用肥料による葉面散布を実施ましょ。

エ 新梢管理

5月下旬から6月中旬にかけては新梢の生育が最も盛んな時期で、樹勢の強い樹や若木等では樹冠内部が混雑しやすくなります。主枝や垂主枝、側枝の基部などから発生する徒長しやすい新梢は、早めに摘心や夏季せん定を実施し、健全な樹体管理に心がけましょ。なお、樹勢の弱い樹については葉面積の確保を優先し、夏季せん定は行わないか最小限とましょ。

(4) りんご

ア 予備摘果

実止まりを確認後、予備摘果を開始し、満開後30日までに終了するように努めましょ。原則として中心果を残し、着果の多い樹や樹勢の弱い樹から摘果ましょ。

結実良好な園地では、長果枝や葉の少ない果そう及び肥大不良果そうの果実は摘除し、着果負荷の軽減を図りましょ。

結実不良の園地では、果実形質がはっきりしてきた頃から予備摘果を実施し、中心果の形質が不良な場合は、形質良好な側果を残すなど着果量の確保に努めましょ。

イ 新梢管理

予備摘果と並行して、主枝や骨格枝の背面、切り口等の不定芽新梢をかき取りましょ。

(5) な し

ア 予備摘果

予備摘果は満開後30日までに終了するように努めましょう。ただし、枝単位で生育にばらつきが散見されるため、結実状況をよく確認しながら作業を進めるようにします

イ 仕上げ摘果

「幸水」の仕上げ摘果は、肥大不良果の除去を中心に行い、満開後50日頃までに終了しましょう。

ウ 新梢管理

予備摘果と並行して芽かきを実施し、主枝や亜主枝の背面枝はかき取りましょう。不定芽新梢が混み合っている場所は芽かきで2～3本に整理し、適度な間引きを実施します。予備枝は風による新梢折損の恐れがなくなったら先端新梢を一本に整理しましょう。

エ 樹勢回復対策

この時期に土壌が乾燥している場合は、樹勢低下やカルシウムの吸収不良による生理障害の発生が懸念されるため、かん水により土壌水分を十分に確保しましょう。

平年より新梢伸長が不良で葉色が薄い場合には、早期摘果で着果量を制限するとともに、5月中を目安にチッ素成分を含む葉面散布用肥料による葉面散布を実施するなどして樹勢回復を図りましょう。

(6) ぶどう

ア 新梢管理

混み合っている新梢、勢いが極端に強く花振るいの危険性が高い新梢及び花穂を持たない弱い新梢は芽かきを行います。また、新梢が30～40cm程度伸びた頃から新梢誘引を行います。ただし、「あづましづく」の新梢は硬く基部から折れやすいので、捻枝して誘引するか、時期をずらして行いましょう。

新梢誘引、花穂の整理、花穂整形は適期を逃さないよう計画的に実施しましょう。

イ 土壌管理

土壌の乾燥が続くと、新梢の初期生育が劣り、新梢伸長と花穂発育のバランスが崩れて花振るいや単為結果等を誘発することが心配されるので、必要に応じてかん水を実施し、土壌水分の確保に努めましょう。

(7) おうとう

1花束状短果枝当たり3～4果（樹勢が適正な場合）を目安に早めの摘果を実施しましょう。なお、樹勢が強く新梢の生長が旺盛な側枝ではやや多めに、樹勢が弱い場合は少なめにし、葉数に応じた着果量とします。なお、「佐藤錦」の生育は平年より6日程度早く推移しているので、摘果、雨よけ被覆、着色管理などの管理作業が遅れないよう計画的に行いましょう。

4 病虫害防除上の留意点

(1) 病 害

ア リンゴ褐斑病

例年リンゴ褐斑病の発生が多い場合は、落花30日後にアントラコール顆粒水和剤 500倍を使用しましょう。

イ モモせん孔細菌病

福島地域、伊達地域ともに春型枝病斑の発生ほ場割合は、平年よりやや高い～高い状況であり今後の風雨によって発生が増加するおそれがあります。

このため、耕種的防除と薬剤散布を組み合わせて実施し、園内の菌密度を低く保つように心がけましょう。園地をこまめに巡回して春型枝病斑を見つけしだいせん除し、適切に処分しましょう。新梢が伸長して葉数が増加すると、春型枝病斑の発見が困難となる場合がありますが（図2）、新梢及び新梢葉の生育不良や罹病葉の発生を発見の目安とし、病斑のせん除を徹底しましょう。また、予防散布を基本にせん孔細菌病防除剤を必ず使用しましょう。



図2 見落とししやすいモモせん孔細菌病の春型枝病斑

ウ モモ灰星病

花腐れから進展した枯れ枝を放置すると、他の核果類やももの成熟期における果実への伝染源となるので、見つけしだいせん除し、適切に処分しましょう。

エ ナシ黒星病

伝染源となる果そう基部病斑は、鱗片の固着を目安に見つけしだい除去して適切に処分しましょう。また、5月中の薬剤防除は約7日間隔で実施し、病原菌密度の低減を図りましょう。

(2) 虫 害

ア ハマキムシ類

リンゴモンハマキ越冬世代成虫の発生盛期は5月3半旬であったと考えられ、第1世代の防除適期は5月6半旬～6月1半旬頃と推測されます。フェロモントラップによる予察調査を行っている場合は、誘殺盛期から10日後頃が防除適期にあたるので、この時期に防除しましょう。

イ モモハモグリガ

モモハモグリガ第1世代成虫の発生盛期は5月6半旬～6月1半旬と考えられ、第2世代の防除適期は6月1～2半旬頃と予測されます。

本種の発生には放任園や無防除のハナモモ園が影響していると考えられるため、こうした発生源が近隣に存在する園地では、今後も発生に注意しましょう。

ウ ナシヒメシンクイ

今後、気温が平年並みに推移した場合、第1世代成虫の発生盛期は6月5半旬頃と考えられるため、第2世代の防除適期は6月6半旬～7月2半旬頃になると推測されます。

本種の第1世代幼虫は、主にモモ等の核果類の新梢に寄生（芯折れ症状）し、第2世代以降はナシなどの果実に移行するので、例年、ナシでの果実被害が多い地域では、近隣のモモ等における防除も徹底しましょう。

エ カメムシ類

山間および山沿いの果樹園では、カメムシ類の飛び込みをよく観察し、多数の飛来が見られる場合は速やかに防除を行いましょう。

表3 果樹研究所における主要害虫に対する防除時期の推定（平成30年5月14日現在）

今後の気温 予測	モモハモグリガ		ナシヒメシンクイ	
	第1世代 成虫盛期	第2世代 防除適期	第1世代 成虫盛期	第2世代 防除適期
2℃高い	5月26日	6月1日	6月15日	6月23日
平年並み	5月29日	6月4日	6月21日	7月1日
2℃低い	6月1日	6月8日	6月30日	7月10日

注) 演算方法は、三角法による。

起算日 モモハモグリガ：4月11日、ナシヒメシンクイ：4月23日

病虫害の発生予察情報・防除情報

病虫害防除所のホームページに掲載していますので、活用してください。

URL：<http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/>

農薬散布は、農薬の使用基準を遵守し、散布時の飛散防止に細心の注意を払いましょう。

発行：福島県農林水産部農業振興課 技術革新支援担当 TEL 024(521)7344

(以下のURLより他の農業技術情報等をご覧ください。)

URL：<http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/36021a/>